

詩の創造における「私」という病

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
汐満 裕子

本論文では、人間存在として独我論に陥らない創造の方法を考察している。そして書くという行為の中でも特に詩を書くという行為は人間存在のあり方の一部に関わるという前提にたち、詩を創造する過程で感じる意識状態である「変更できる主体」を中心に、創造の過程で陥る「病」に注目する。ここで言う「病」を筆者は「私としての居心地の悪さ」と定義する。これは主体の意識状態の不具合といえるものである。そして筆者は本論文で、創造における三つの「病」、「自分を見失う病」、「詩を書けない病」、「詩を書かない病」をとりあげ「病」を徹底的に見つめなおすことに重点を置く。また筆者は、本論文で三つの「病」を見つめることによって現れる病の要素に注目し、この病の要素を、主体(私)のあり方であると考える。

第一章では、まず人がなぜ創造するのか、なぜ創造の中でも詩をとりあげたのかを述べる。次にフロイトの考える詩とは何かということを見ていく。そしてフロイトの視点を用いて筆者が考える詩を書くことの効用「現実を書き換える」、「不安定さを抑止する」、「カタルシス作用」を説明する。ここで筆者は詩を書くことの三つの効用で重要な働きをするものを「変更できる主体」であると考え。しかし、詩を創造する過程で「変更できる主体」は効用だけでなく、自分自身を見失う可能性を与える。ここでは「変更できる主体」がなぜ自分自身を見失うのかをアリエティの創造の過程という概念を用いて説明する。

二章では、先に述べた三つの「病」が「自我喪失の病」と「自我執着の病」という二つに分けることが出来ることを導き出す。二つに分ける着眼点は「変更できる主体」であり、「変更できる主体」を監視する「自我」である。また「病(私としての居心地の悪さ)」を感じない創造のあり方を探るために、「病(私としての居心地の悪さ)」を作り出す要素を見つめていく。そして筆者は、「自我」を喪失し、「自我」に執着する「私」のあり方が「病」に影響を与えていると考える。ここでは精神科医であるアリエティと飯森眞喜雄と渡辺哲夫の考え方から二つの「病」である「自我喪失の病」と「自我執着の病」を考察する。

三章では、詩を創造する過程で病に陥らないために、上田閑照とサルトルの主体である「私」と「他者」の視座を参考にして、創造における他者の必要性を見ていく。四章では上田の主体をふまえたうえで、アリエティ、渡辺、飯森の考えから創造に必要な他者がどのような他者かを考察する。